わたしの聖戦（ジハード）

◎◎女性が働くということ◎◎ 82

医学ジャーナリスト・医学博士　植田美津恵

景気に左右される結婚願望

昨年来の不況以後、女性の「結婚願望」や「専業主婦」希望者が増えているという。同様の傾向は、日本のみならずお隣の中国や韓国でもあるらしい。

不況だから、とか、先行き不安定だから、などの社会状況がなぜ女性の意識や行動を結婚に向けさせるのか―、この現実に何となく誰もが納得し、あえて疑問を呈しない状況も不思議といえば不思議ではないか。

わが身を振り返ってみれば、今でこそキャリアウーマンのごとく振る舞っているが、もともと仕事を続けたのは「生活のため」というあたりが本音だった。

結婚しても仕事は続けたいというほど仕事に情熱を持っていたわけでもなく、颯爽とハイヒールを打ち鳴らしながら社内を闊歩する「できる女性」にあこがれたわけでもない。できたら、専業主婦でのらりくらりと暮らしていたかったのだが、いかんせん状況がそうさせてくれなかっただけである。本音をいえば、今でも専業主婦になって毎日だらだらと暮らしたいという思いが頭をかすめることがある。一部をのぞき、多くのキャリアウーマンは似たようなことを考えているはずだと思っているのだが、いかがだろう。

専業主婦だって楽ではない、とよく聞くが、それはほとんど間違いだと思う。

明らかに専業主婦は「ラクチン」だ。たとえ、夫の収入が期待より少なかったとしても、いやな舅や姑がいようとも、隣近所に気の合わない人があろうと、やはり専業主婦は働く女性より守られた位置にある。専業主婦だって楽ではないというのは、「あなたたちが思っているほど（楽でない）」という意味なのだ。だからこそ、不況にあってこの先給料が伸び悩むことを予想し、ひとりで生活していくことに不安を感じ、結果的に女性たちの結婚願望が募るのである。つまり、誰かに寄り添う安定がほしいのだ。そして誰もそのことをおかしいとはいわない。むしろ、あるべきところに落ち着くことにホッとするような雰囲気さえ漂っているではないか。女性の権利だとか、男性と同じように働くとか、そういった主張より、さっさと結婚して主婦となる道を選ぶ女性たちの行動に、より安心感を覚えているのがわかる。誰が。社会全体が、である。

ここで、男性たちには同情せざるを得ないだろう。同じことを男性が口にすることは許されないからだ。いくら草食系男子といわれようが声を大にして女性や結婚に安定を求めるわけにはいかない。男性の育児休暇を増やそうとする動きがあっても、専業主夫を自負する男性がいたとしても、それらは少数派だから許されているのであって、はじめからその立場を目指す男性の声など誰も耳を貸さないだろう。不況だろうが給料が安かろうが、やはり男性は社会のなかで働くことこそが本道だというのは、根強く存在する社会の意識なのである。

女性の社会進出を促す機運は、たかが景気に左右される程度のものだったのかと少々落胆する気持ちもあるが、現実を認めないわけにはいかない。何やら、女性たちの陰謀にまんまと踊らされている気もしないではないが、もしかしてこれこそが「女性中心の社会」であり、ベストなあり方なのかもしれない。

イラスト・三浦義雄